

知的障害養護学校における個別の指導計画の改善

—個に応じた指導の充実をめざした「個人カード」の作成—

佐伯 恵子*・谷口 紘八*・辻野 智二**

Improvement of Individualized Instruction Plans in the School
for Mentally Handicapped children

—Making of Individualized Cards which aimed to fulfillment
about Individualized Instruction—

Keiko SAEKI, Kouhachi TANIGUCHI and Tomoji TSUJINO

はじめに

障害のある児童生徒の教育において一人一人の発達や個性に目を向け、個に応じた指導を行っていくことは不可欠なことである。新学習指導要領¹⁾でも述べられているように、近年、この教育の実現のために個別の指導計画に基づいた指導の重要性が各方面から指摘され、取り組みがなされるようになった。また、インフォームド・コンセントやアカウンタビリティを重視する考え方が広まり、保護者のねがいを十分に把握し個別の指導計画に生かすことが求められるようになってきている^{2) 3) 4) 5)}。

本校では、個に応じた指導の充実のために、1987年より全校児童生徒一人一人に対し「個人カード」を作成し、教育実践に役立てている。「個人カード」とは、児童生徒一人一人の実態を把握し、目標設定から指導の経過、評価までを明確に記録するもので、担任を中心に各学部担当教師、さらに保護者の協力により作成され、本校における個別の指導計画をあらわすものである^{6) 7)}。

この「個人カード」は、本校の一人一人の児童生徒の望ましい個人目標設定と効果的で適切な指導の基盤となるものとして活用されてきたが、保護者とのより一層の連携や指導の一貫性のために「個人カード」の見直し・改善を行った。ここでは、その研究成果を報告する。

研究の課題と方法

1. 研究課題

的確な実態把握や目標設定評価のための「個人カード」を改善し、個に応じた指導の充実を図る。

2. 研究の方法

平成9年度より3年計画^{8) 9)}で「個人カード」の見直し・改善を行う。初年度は、これまで使用してきた小学部、中学部、高等部の「個人カード」の活用状況を点検し、課題の整理を行う。本校の新しい教育課程の編成を踏まえ、改善の方針を示し、一部児童生徒への試験的活用を行いながら、新しい「個人カード」の試案を作成する。また、児童生徒の全般的な記録などを保管する「個人ファイル」についても見直し・改善も行う。2年目は、この新「個人カード」を全校児童生徒で使用し、個に応じた指導の実践を行う。最終年度は前年度の実践の結果をもとに、さらに検討・修正を加え、「個人カードの手引き」を作成する。

研究の経過

1. 「個人カード」「個人ファイル」の見直し・改善 (平成9年度)

研究課題遂行にあたり小学部・中学部・高等部を縦割りにした研究グループでこれまでの「個人カード」の問題点について検討を行い、全面的な見直しを行った。主な改善点は次のとおりである。

- ・個に応じた指導のより一層の充実をめざし「手だて」を明記する。
- ・保護者や関係諸機関との連携がより促される内容のものとする。

* 附属養護学校

** 技術教育

- ・学部教育目標、連絡簿、個人ファイルとの関連を明確にする。
- ・指導の継続や一貫性を図るため各学部の書式を揃える。
- ・年度当初に作成し、1年間を通した系統的指導実践を表記し、必要に応じて2学期・3学期は加筆・修正を行う。

また、これと併せて児童生徒の記録を保存する「個人ファイル」についても見直し・改善を行った。主な改善点は次のとおりである。

- ・「個人ファイルは児童生徒の全般的な記録を保存し、年度を越えた担任間での引き継ぎを確実にし、小・中・高の一貫した教育を行うための資料とする。」という目的の共通理解を図る。
- ・必ず保存するもの、学部や個人により必要なものなど保存資料の分類を行う。
- ・分類表紙を作成し保存方法を統一する。

2. 新「個人カード」を活用した実践（平成10年度）

全校児童生徒を対象に、新「個人カード」を活用した実践を行い小・中・高各学部及び養護教諭の視点からの事例研究を行った。それぞれの事例をとおして保護者や職員間、医療との連携による教育の成果を明らかにした¹⁰⁾。

3. 「個人カードの手引き」の作成（平成11年度）

平成10年度の実践をもとに、「個人カード」の書式や運用方法を一部改良した。改良点は次のとおりである。

- ・毎学期ごとに作成する。
- ・教育課程の学部教育目標の変更に併せて「児童生徒のようす」の項目の見出しを変更する。
- ・次年度への引き継ぎのための学部間連絡会を年度末から新年度当初とする。

このような改良を踏まえ、これまでの実践に基づいて「個人カードの手引き」の作成を行った。

「個人カード」の内容と作成および活用の方法

ここでは、「個人カードの手引き」⁹⁾を参考に、「個人カード」作成における基本的な事項を以下に示す。

1. 「個人カード」の構成と内容

「個人カード」は、図1に示すように児童生徒の実態を把握する「児童生徒のようす」における「総合所見」、「学部教育目標に対応した項目」と、この項目に対応した「目標」と「手だて」、及び「保護者のねがいなど」「特記・引継」から構成される。なお、評価に関しては「個人カード」と対応させた図2の「連絡簿」（通知表）を活用する。

個人カード 中学部 年() H 年度 学期 担任()		
児童生徒のようす	保護者のねがいなど	
<総合所見>		
	目 標	手 だ て
①心身の調和的発達	①	①
②自主的、意欲的態度	②	②
③対人関係、道徳的態度	③	③
④生活習慣、日課処理	④	④
⑤言語、数量	⑤	⑤
⑥自然、社会、作業、職業	⑥	⑥
⑦造形、音楽、運動	⑦	⑦
○その他		
特記・引継		

図1 個人カード

連絡簿()	中学部 年 学期
総合所見	総合評価
指導目標	目標の達成状況
<心身の調和的発達>	<心身の調和的発達>
<自主的、意欲的態度>	<自主的、意欲的態度>
<対人関係、道徳的態度>	<対人関係、道徳的態度>
<生活習慣、日課処理>	<生活習慣、日課処理>
<言語、数量>	<言語、数量>
<自然、社会、作業、職業>	<自然、社会、作業、職業>
<造形、音楽、運動>	<造形、音楽、運動>

図2 連絡簿

(1) 児童生徒のようす

1) 総合所見

児童生徒の全体像、「こう育ってほしい」というねがいを示す。

2) 学部教育目標に対応した各項目

本校教育課程の学部教育目標を観点とする項目ごとの児童生徒の実態を示す。各学部の目標に合わせるため表記に多少の違いがある。また、学部教育目標に変更があった場合には「個人カード」の項目もこれに合わせて変更する。

(1) 目標

上記の各項目に対応した目標は具体的で達成可能なものとするが、必要に応じて将来を見通した長期的目標を設定する。また、児童生徒の状況(目標達成の緊急度・必要度など)によって項目を合わせたがり、絞り込んで設定する場合もある。

(3) 手だて

目標達成のための具体的な方法を示す。長期的な目標については目標達成に必要な積み重ねを大切に、当面の手だてを示す。

(4) 保護者のねがいなど

家庭訪問、個別教育相談、その他の連絡や話し合いで得られた保護者のねがいを、さらに必要に応じて医療、福祉など関係諸機関からの情報を記入する。

(5) 特記・引継

次年度への引き継ぎに役立つよう、特に注意を要すること、未解決の課題などを具体的に分かりやすく記入する。

(6) 総合評価、目標の達成状況について

総合評価、目標の達成状況は学期ごとの連絡簿に記入する。総合所見は、どう育っているかについて、生活全般から記す。目標の達成状況については、目標に対してどのような達成状況にあるかを記入する。生活単元学習や作業学習のような各指導形態における活動の状況など、目標達成場面のようすをできるだけ分かりやすく具体的に記入する。

2. 「個人カード」の作成

(1) 作成者

担任が作成し、それを小・中・高の各学部会で検討する。その結果を個別教育相談で保護者へ説明し、さらに保護者のねがいや意見を取り入れる。必要に応じて医療、福祉などの関係諸機関からの情報も記入する。

(2) 作成の手順と内容

個人カードの作成の手順と内容は次の図3に示すとおりである。

(3) 具体的記入に当たって

ここでは、具体的記入に当たっての配慮事項を示す。

- ・見やすさ、分かりやすさを考慮して、各学期分の「個人カード」はできるだけA4用紙1枚に納める。
- ・前学期からの変容が良く分かるよう、必要に応じて朱書きやアンダーラインを書き加える。
- ・各項目と指導形態との対応は学部教育目標とそれぞれの指導形態でめざす目標との関連から記入する。以下に示す項目例は中学部のものであり、各学部の状況に合わせて記入する。
 - ①心身の調和的発達：自立活動。
 - ②自主的・意欲的態度：生活単元学習やチャレンジ学習（総合的な学習の時間）など。
 - ③対人関係、道徳的態度：道徳、人への関心・協調・協力の態度。
 - ④生活習慣、日課処理：日常生活の指導。
 - ⑤言語・数量：国語・数学、チャレンジ学習。
 - ⑥自然、社会、作業、職業：作業学習、社会見学、現場実習など。
 - ⑦造形、音楽、運動：朝の運動、マラソン、水泳、チャレンジ学習など。

3. 「個人カード」の活用

(1) 指導の一貫性

児童生徒の個別の指導計画である「個人カード」を作成し教育実践に役立てることは複数担任間、学部担当者間、学習グループなど班別やチームでの指導を一貫性のあるものにする。また、新旧担任・学部による連絡会で「個人カード」をもとにして新年度への引き継ぎを行うことで、指導の継続性や一貫性を一層確実なものとしている。

(2) 保護者との連携

「個人カード」は、その作成の段階から家庭のようす、保護者のねがいを十分に把握し、それを指導計画に生かすことが求められる。さらに個別教育相談において、児童生徒のようす、指導目標、手だてを具体的に示し、保護者の了解・協力を求めるとともに保護者のねがいを尊重し指導に反映させていく。「個人カード」を活用した営みは保護者との連携をより深めるものでなければならない。

(3) 指導実践

「個人カード」で示された個別の指導計画は日々の教育活動の中で実践される。学部教育目標の項目を観点とする指導目標や手だては、実際の学習場面では日常生活の指導、生活単元学習、作業学習、国

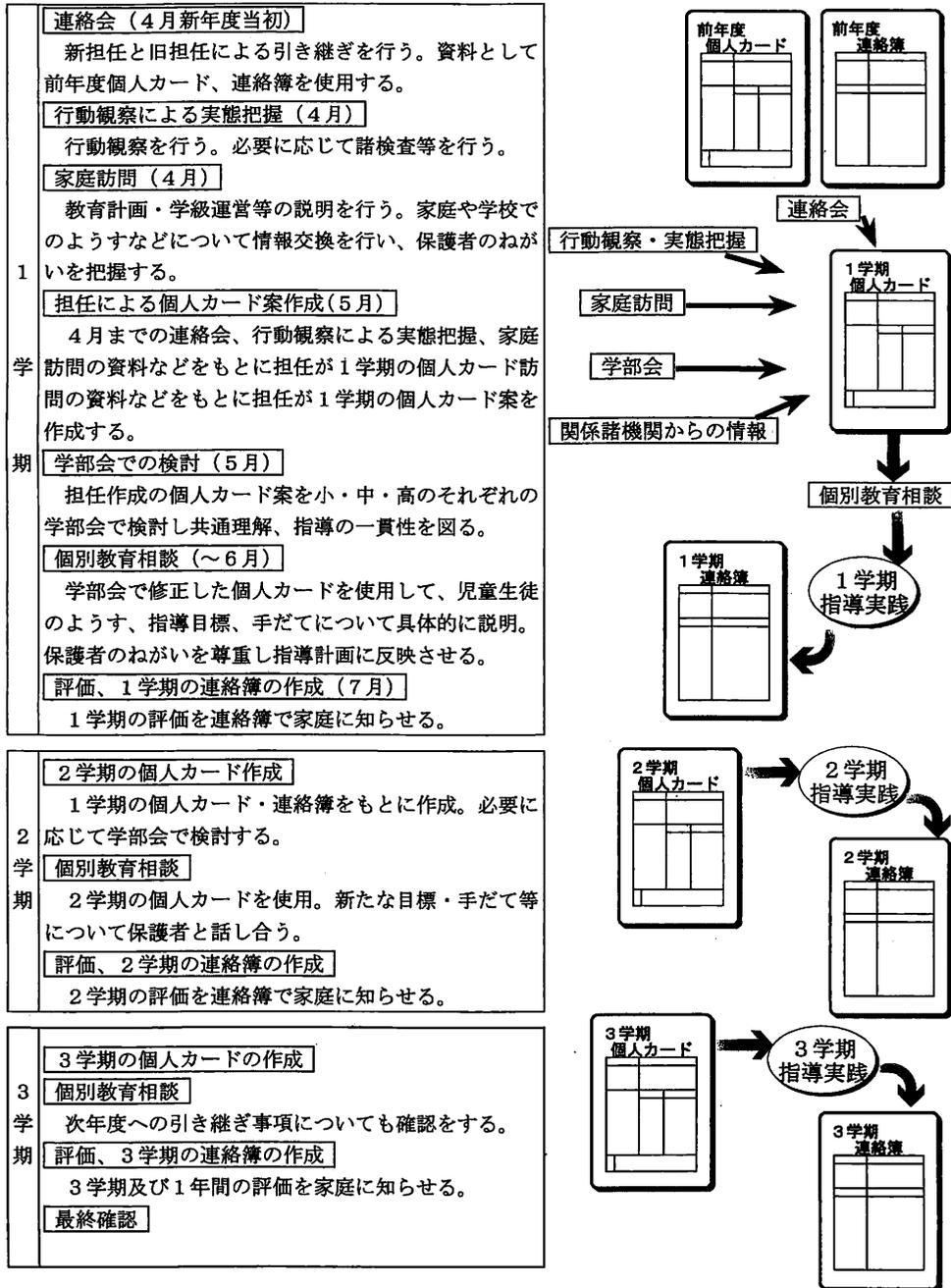


図3 「個人カード」作成の手順

語・算数(数学)、チャレンジ学習(総合的な学習の時間)などの指導形態の中で具体的に実践される。それぞれの指導形態ごとの学習計画は「個人カード」に示された一人一人の目標達成・課題解決をめざすものとなる。

(4) 評価

総合評価及び目標の達成状況については「個人カード」と対応させた「連絡簿」に記入する。

「個人カード」は、一人一人の児童生徒を中心に据え、保護者と共に実態把握、目標の設定、手だて

表1 「個人カード」の具体的記入例

個人カード 中学部()年()		H()年度(3)学期 担任()	
児童・生徒のようす		保護者のねがいなど	
<p><総合所見> ○友達と仲良く遊ぶことができ、学習面でも興味のあることには積極的である。 ○自信が持てず行動が止まることがある。 ○発作があり健康面での配慮が必要である。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・思春期を迎え体調の変化が気になりである。 ・自信を持てるようになってきている。もう少し言葉が伝わるようになってほしい。 ・家事や身の回りのことをもう少し上手になって欲しい。 ・生理の手当、発作等の心配。(○○病院通院1/月) 	
		目 標	手 だ て
<p>①心身の調和的発達 ・歩行がやや不安定で時々ふらつく。てんかん発作(1日に数回小発作)あり。朝夕服薬。 ・手先の細かい作業時に指先が震える。 ・大発作が久しぶりにあった(10/24)。 ・2語文を話す。発音が不明瞭で身近な人以外には聞き取りにくい。</p> <p>②自主的・意欲的態度 ・日課をほぼ理解し、自主的に行動ができる。 ・自信が持てない動きが止まりがちであるが諸活動への参加態度は積極的である。</p> <p>③対人関係、道徳的態度 ・友だちや教師と積極的にかかわる。 ・友だちと一緒にってふざけたりする。</p> <p>④生活習慣、日課処理 ・ほぼ自立。身の回りのものの整理整頓、衣服の調節などは苦手。 ・食べこぼしがある(手先の震え?)。 ・行儀や姿勢、マナー等はこれからの課題。 ・休み時間は友達と元気に遊ぶ。 ・登下校は自立。 ・10月に初潮。確認しながら一緒に生理の手当を練習中。</p> <p>⑤言語・数量 ・ひらがなの清音が読める。名前など身近な文字は書ける。 ・10までのものは数えられる。100までの数唱ができる。</p> <p>⑥自然、社会、作業、職業 ・作業学習への意欲的態度が見られる。 ・手先が震え不器用、細かい仕事は難しい。</p> <p>⑦造形、音楽、運動 ・歌や踊りは好き。大勢の前では緊張してしまってもじもじするが、教室で歌うときは良く声を出す。 ・絵を描くのが好き。 ・止まってしまいがちであるが、そばで励ますと続けて走ることができる。</p> <p>○その他 ・両親共働き、同居の祖父の協力が大きい。 ・家では、猫と遊ぶことが一番の楽しみ。</p>		<p>① 自分の体調について報告できる。 ・身振りサインを交えて話をする。</p> <p>② 「お別れ発表会」では、活動の見通しを持ち自ら、進んで練習や準備活動ができる。</p> <p>③ 集団の一員として相手のことを考えた態度を身につける。</p> <p>④ 身の回りの整理整頓、衣服の調節ができるようになる。 ・食事のマナーや姿勢など中学生らしい立ち振る舞いを身につける。 ・生理の手当が一人できる。</p> <p>⑤ ひらがなが書ける。 ・デジタル時計を大まかに読める。 ・チャレンジ学習でコンピュータを自分で操作してクイズやパズルを楽しむ。</p> <p>⑥ 陶工班では、紐作りで紐の太さや隙間に気を付けて作ることができる。</p> <p>⑦ 大勢の前でも自信を持って歌ったり踊ったりできる。 ・3000mを自分のペースで最後まで続けて走ることができる。</p> <p>○家庭で積極的に手伝いができるようになる。</p>	<p>① 体調に合わせて本人と確認して活動量に配慮する。 ・主にマカトンサインを使用。朝の会・帰りの会・国語の時間に指導。</p> <p>② 学習計画を身近な場所に示し分かりやすくする。 ・分からなかったり困ったりするときは自分から意思表示するまでじっくり待つ。</p> <p>③ じっくり話し、落ち着いてまわりのことをよく考える機会を増やす。</p> <p>④ 着替えの後始末、ロッカーの整理整頓の確認や衣服の調整の確認をする。 ・食事の姿勢や食べこぼしに注意することを促す。 ・一つずつ声掛けをして確認する。</p> <p>⑤ 絵日記やドリルで毎日練習する。 ・数学の時間の他に日課の中でも時間についての問いかけを多くする。 ・基本的操作を練習し分かりやすく楽しめるソフトを紹介する。</p> <p>⑥ 具体物を見本に示し何事もよく見て丁寧に取り組むことを伝える。</p> <p>⑦ 教室でもマイクを使いサインを交えた歌を練習する。 ・体調に配慮しながら走るようにする。 ・約25分で走るよう声掛けしてペース配分をする。</p> <p>○日記や朝の会で手伝いについて報告、発表する機会を作る。</p>
<p>特記 ・発作の形が変わってきている。主治医によると、また、大発作の可能性もあり、しばらくは要経過観察とのことである。 ・春休み○学園ショートステイを予定。(祖母の入院介護のため)</p> <p>引継 ・マラソン大会で21分で走り2位になった。非常に嬉しく本人・家族共の自信となり、お別れ発表会でのサインを交えた自信ある演技にもつながった。今後の体力作りとサインの活用を続けて欲しい。</p>			

の工夫などを行っていき過程でできあがっていくものである。したがって、今現在解決したいことが具体的に記されることになる。そこでは、児童生徒の長所を十分とらえ、個性の伸長を図る視点から、肯定的な人間観が基本となるが、問題状況の改善が求

められる場合には、問題状況について客観的に記す必要もでてくる。

指導を行った結果、目標の達成状況がどうであったかを目標項目ごとに振り返り、保護者(家庭)に伝えるものが「連絡簿」である。「連絡簿」は、本

人のがんばりを改めて家族で認め合ったり、成長を喜び合ったりするものである。本人や家族の希望をつなぎ、励まし、今後の指標を示すものにしたと考える。「個人カード」を受けて、各目標の達成状況や総合評価を記す際には、保護者や本人が十分に納得でき、今後の期待と意欲を高めるものになるように心がける。表現についても、分かりやすく肯定的で暖かい見方が伝わるように配慮する。

個人情報の公開が求められる現代にあっては、「個人カード」「連絡簿」のいずれにおいても、個人の尊厳に配慮した表現を心がけることは言うまでもない。

(5) 資料の保管

「個人カード」「連絡簿」は「個人ファイル」の中に保管される。「個人ファイル」は、児童生徒の全般的な記録（学習の記録、諸検査、内申書・調査書、家庭に関する資料、現場実習・進路、健康に関する資料など）を保存し、年度を越えた担任間での引き継ぎを確実にし、小・中・高の一貫した教育を行うための重要な資料である。また、「個人カード」「連絡簿」の文書ファイルデータは、本校コンピュータネットワークのサーバーに個人資料として保存する。サーバーにデータを保存することで随時活用が一段と可能になる。いずれの資料も保管の期間を最終学部卒業後3年間とする。なお、個人情報の保護には十分に配慮することは不可欠である。

「個人カード」の活用の実際

ここでは本校小学部から中学部へ入学した中学部1年生の男子生徒の1学期の実践例をとおして「個人カード」の活用の実際を紹介する。

1. 連絡会

4月当初の学級担任の決定後、小学部6年生当時の担任と中学部1年生の新担任で連絡会を行った。連絡会では、6年生3学期の「個人カード」と「連絡簿」をもとに引き継ぎを行った。旧担任からは、一人で砂遊びをしていることの多い生徒であるが、今は何の時間であるかを分かりやすく説明することで、中学部の生活にも十分に対応できるだろうという説明等があった。

2. 行動観察、実態把握

新学期開始まもなく対象生徒の行動観察や諸検査による実態把握を行った。

3. 家庭訪問

4月中旬に家庭訪問を行った。中学部の教育計画

や学級経営等について説明するとともに、家庭での生活のようすや本人が過度の緊張や無理をしないで中学部の生活にうまくなじんでほしいという保護者の不安と期待の両方を伺った。

4. 「個人カード」の作成

連絡会、実態把握、家庭訪問等の資料を基に担任が「個人カード」を作成した。

5. 学部会での検討

中学部の職員全員で「個人カード」の検討を行い、具体的な指導場面における共通理解を図った。中学部の生活の流れの理解やよりスムーズなコミュニケーションのための手だて、最近見られる立ち眩み等について特に話題となった。

6. 個別教育相談

「個人カード」を使って、学校でのようす、指導目標、手だてについて具体的に説明し、保護者の了解・協力を求めるとともに、保護者からの意見や希望を伺った。中学部の生活にうまく対応できているので一安心であること、立ち眩みについては病院で受診したが異常はなかったことなどが話題となった。

7. 日々の実践

保護者とは連絡帳や送迎時に、職員間では学部会や授業の打ち合わせ等で情報交換を行いながら実践を進めた。コミュニケーションについては、学級の場面だけでなく担任以外の職員が担当する班別作業学習などでも自分から表現することを大切にして取り組んだ。陶工班の作業では、花瓶を一つ完成することに「できました」と報告する練習をした。家庭からも「自分から人に声を掛けることが少ないので、報告の練習は良い勉強になると思います」とのことであった。実際の作業を通して「〇〇先生できました」「(作品に銘を入れるための)ハンコ貸して下さい」と自ら発言できるような姿が見られた。その成果については「家庭でもしっかり誉めました」という保護者からの報告もあり教育効果に対する評価の確認を行った。また、立ち眩みについては、家庭での睡眠時間、学校での運動量など活動を共にする者全員が十分に配慮しながら対応した。

8. 「連絡簿」の作成

指導形態ごとの担当者による資料をもとに、担任が1学期の評価として「連絡簿」を作成した。中学部の生活をほぼ理解できるようになったこと、自分から言葉で表現することが見られるようになってきたことなど、1学期の評価を「連絡簿」で家庭に知らせた。

個人カード 中学部(1)年() H(11)年度 1学期 担任()	
児童生徒のようす	保護者のねがいなど
<総合所見> ・ 中学部の生活の流れをほぼ理解できているようで、誘われたり促されたりするとみんなと一緒に活動できる。 ・ 友達を気遣ったり、自分の気持ちを伝えようとするできごとが見られる。	・ 小学部から中学部に入り生活が変わるだろうが、うまくなじんでいって欲しい。 ・ 高等部進学希望
①心身の調和的発達 ・ 反響言語や独語が見られるが、ゲームやビデオが欲しいときは文字や言葉で意思表示ができる。 ②自主的、意欲的態度 ・ 促されて参加することが多いが、好きなこと興味のあることには積極的に取り組む。 ③対人関係、道徳的態度 ・ 友達を気遣ったり、自分の気持ちを伝えようとするできごとが見られる。 ・ 友達が失敗しそうときは適切な誘導ができる。 ・ 家庭ではひとりでビデオやゲーム、漫画を楽しむことが多い。 ④生活習慣、日課処理 ・ 身の回り ・ 奇 ・ 野 ・ ベ ・ パ ・ ⑤書 ・ カ ・ 100 ・ ア ・ し ・ コ ・ ⑥自 ・ 手 ・ そ ・ ⑦適 ・ キ ・ 砂 ・ 途 ・ 特 ・ 記 ・ 引 ・ 繼	目 標 ① いろいろな場面で自分の気持ちを表現することができる。 ② 「合宿」「運動会」などで活動の見通しを持って積極的に取り組むことができる。 ③ 友達と協力して活動できる。
	手 だ て ① コミュニケーションの補助手段(絵・文字・具体物・写真・シンボル他)を活用することで意思表示ができるようにする。 ② 繰り返し練習したり、絵カード等を使って丁寧に説明をして見通しを持ちやすくする。 ③ 友達と力を合わせる必要のある活動の機会を多くする。(準備活動、運搬、チームゲームなど)
(連絡簿) 中学部(1)年(1学期)	
総合所見 中学部の生活の流れをほぼ理解できているようで、誘われたり促されたりするとみんなと一緒に活動できます。友達を気遣ったり、自分の気持ちを伝えようとするできごとが見られます。	総合評価 中学部の生活にスムーズにとけ込むことができました。授業中はしっかりとがんばって、休み時間はソファーでくろいで、中学部での自分のペースを掴んだようです。「朝の会」や「帰りの会」での発表や「班別作業」での報告など言葉で伝えることがうまくできるようになってきています。いろいろな場面で自発的に話せるようになって欲しいと願っています。
指導目標 <心身の調和的発達> ・ いろいろな場面で自分の気持ちを表現することができる。 <自主的、意欲的態度> ・ 「合宿」や「運動会」の諸活動に積極的に参加できる。 ・ 活動の見通しを持って意欲的に取り組むことができる。 <対人関係、道徳的態度> ・ 学級や学部、学習グループ等を理解できる。 ・ 友達と協力して活動できる。 <生活習慣、日課処理> ・ 食事や学習場面で正しい姿勢が保てる。	目標の達成状況 <心身の調和的発達> ・ 「朝の会」の「がんばること」や「帰りの会」の「がんばったこと」の発表で、新学期当初は日程の絵カードを目の前で見せ手掛かりにしていました。最近では自分で考えているようで「国語・数学」や「選択学習」「水泳」等好きなことを発表できるようになりました。 <自主的、意欲的態度> ・ 「校内合宿」では食事が終わると風呂の準備をするというように次の活動を良く理解して行動できました。調理の手際もよく、味見をして「おいしい」と言っていました。 ・ 「運動会」では徒走、ダンス、魚釣り、それぞれの競技の内容を理解して活動に参加できました。道具の運搬や準備活動にも力を発揮していました。 <対人関係、道徳的態度> ・ 中学部では学習グループの種類が様々で場所もそれぞれ違います。次の学習場所をあらかじめ説明しておくことで理解して移動することができました。 ・ 誘導したり、手助けしたり、クラスの友達を気遣うようすが見られました。 <生活習慣、日課処理> ・ 寄りかかった姿勢になりやすいので、その場で注意を促しました。声を掛けると、さつと背筋を伸ばすことができ、注意をすることも少なくなってきました。

図4 個人カードと連絡簿

9. まとめ

新しい環境での生活に不安のあった本生徒であったが、中学部の生活の流れをほぼ理解し行動できるようになった。体調の変化やコミュニケーションの課題についても保護者や中学部職員間で連携を取りながら対応してきた。その結果、元気いっぱい走

たり、自ら伝えようとする姿が見られるようになった。

1学期の「個人カード」「連絡簿」をもとに、2学期分の「個人カード」を作成し、個別教育相談等で保護者との連携を図りながら、さらに実践を積み重ねていきたい。

研究のまとめと今後の課題

これまでの「個人カード」の見直し、改善を行うことによって新学習指導要領に明示された個別の指導計画に対応する新「個人カード」を作成し実践を行った。得られた結果を要約すると次のようになる。

- ①学部教育目標を記入の観点として書式を統一し、新たに「手だて」や「特記・引継」を明示することにより新「個人カード」は指導の一貫性を図るための有効な資料となった。
- ②個別教育相談等で得られた保護者のねがいをより具体的に記しながら実践することで保護者との連携を深めることができた。
- ③インフォームド・コンセントやアカウンタビリティに対する適切な取り組みが可能となった。
- ④「個人カード」と「連絡簿」を完全に対応させたことにより、実態把握、目標設定、手だて、評価がより分かりやすいものとなった。

ここでは「個人カードの手引き」による「個人カード」の作成等について述べた。しかし「個人カード」の作成だけで個に応じた指導の充実が図られるものではない。具体的指導場面ではより細かな手だてが必要となってくる。「個人カード」が一人一人の児童生徒にとってより有効な個別の指導計画であるためには、日々の実践の中で児童生徒の指導の目標や手だてを明確にし、さらにその評価を正しく行う取り組みを積み重ねていかなければならない。また、

「個人カード」「個人ファイル」の取り扱いに当たっては、個人情報の保護のために細心の配慮が必要であることはいうまでもない。

新しい「個人カード」の取り組みはまだ始まったばかりである。この「個人カード」をより有効に活用することをとおして、個に応じた指導のさらなる充実をめざしていきたい。

参考文献

- 1) 文部省(1999): 盲学校、聾学校及び養護学校 教育要領・学習指導要領。大蔵省印刷局。
- 2) IEP 調査研究会編(1995): 個別教育計画の理念と実践。安田生命社会事業団。
- 3) 金子 健(1999): なぜ今、個別の指導計画なのか。発達の遅れと教育、日本文化科学社、502、4-6。
- 4) 河村 久(1999): 個別指導計画とは何か。実践障害児教育、学研、308、2-5。
- 5) 大友 昇(1997): 個別教育計画(IEP)を考える。熊本行動教育研究会会報 No. 84~88。
- 6) 熊本大学教育学部附属養護学校(1987): 小・中・高の一貫性ある教育を進めるにはどうしたらいいか。研究紀要16。
- 7) 熊本大学教育学部附属養護学校(1989): 個人の課題を可能な限り反映させた効果的な指導を求めて。研究紀要17。
- 8) 佐伯恵子(1998): 「個人カード」「個人ファイル」の見直し・改善。研究紀要22, 熊本大学教育学部附属養護学校、43-53。
- 9) 佐伯恵子(2000): 個別の指導計画の改善。研究紀要23, 熊本大学教育学部附属養護学校、21-32。
- 10) 濱田剛・寺尾佳代子・他(1998): 個に応じた指導の実践。研究紀要22, 熊本大学教育学部附属養護学校、63-87。